

降誕祭主日礼拝説教「天使の告げる恵みのおとずれ」

日本基督教団石神井教会 2018年12月23日待降節第4主日

【旧約聖書日課】イザヤ書 11章1～10節

- 1 エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち
- 2 その上に主の霊がとどまる。
知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、恐れ敬う霊。
- 3 彼は主を恐れ敬う霊に満たされる。
目に見えるところによって裁きを行わず、耳にするところによって弁護することはない。
- 4 弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しい人を公平に弁護する。
その口の鞭をもって地を打ち、唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。
- 5 正義をその腰の帯とし、真実をその身に帯びる。
- 6 狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。
子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。
- 7 牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、
獅子も牛もひとしく干し草を食らう。
- 8 乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の巣に手を入れる。
- 9 わたしの聖なる山においては、何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。
水が海を覆っているように、大地は主を知る知識で満たされる。
- 10 その日が来れば、エッサイの根は、すべての民の旗印として立てられ
国々はそれを求めて集う。
そのとどまる場所は栄光に輝く。

【福音書日課】ルカによる福音書 1章26～38節

²⁶六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。²⁷ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。²⁸天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」²⁹マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。³⁰すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。³¹あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。³²その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。³³彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」³⁴マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」³⁵天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。³⁶あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。³⁷神にできないことは何一つない。」³⁸マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

「おめでとう！」

クリスマスの祝いの週を迎えました。昨日の土曜日に準備に来られた皆さんは、まだどなたもおっしゃられていませんでしたが、今日はお互いにクリスマスのご挨拶をされたのではないのでしょうか、「クリスマス、おめでとうございます」と。

教会が古くから定めてきた暦では、クリスマスの祝いは12月24日の日暮れから、つまり「クリスマスイブ」からです。今日は、まだ23日ですから、クリスマスに備える「アドヴェント（待降節）」が残っています。今日クリスマスの祝いを始めるのは、少しばかり気が早いのです。ですから、教会によっては、今日はまだ、クリスマスの祝いも挨拶もいたしません。「待降節」最後の日曜日の祈りになお留まって、クリスマスに備えていらっしゃる教会があるようです。そういう話を聞くと、わたしはどうも影響されやすい性質で、「クリスマスの祝いの礼拝です」と言いながら、どこかで「まだ待降節です」と抗いたくなります。礼拝堂の聖壇をすべて「クリスマス」の「白」色に整えてしまわないで、どこかにまだ「待降節」のしるしである「紫」色を残しておけないか、などと。

けれども、クリスマスの祝いの礼拝においての皆さんの前で、これ以上余計な理屈はやめましょう。今日、わたしたちは、まだ「待降節」かもしれないけれども、「クリスマス、おめでとうございます」とお互いに挨拶し合うために、ここに集められてきたのです。大いに、「おめでとう」と挨拶し合ひましょう。それは、少しもおかしなことではないのです。わたしたちは、すでに、クリスマスの喜びの知らせを聞いたからです。

「おめでとう」。そう、今日の福音書日課の天使は、告げていました。御子キリストはまだお生まれではありません。まだ、ようやく母マリアの胎に宿ったかどうか、という段階です。けれども、マリアの前に現れた天使ガブリエルは、言いました、「おめでとう」。この天使は、あのクリスマスの夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた羊飼いたちのところに現れた主の天使(2:9)と同じ天使でしょう。「天のかなたからはるばる来ました。うれしい知らせを伝えるためです」と讚美歌(246番)を歌いましたが、あの「うれしい知らせを伝えるため」に来た天使は、幼子がお生まれになられてからだけでなく、もっと早くから来ていたのです。そして、マリアに、挨拶をしたのでしょうか、クリスマスの喜びを分かち合おうとして、「おめでとう」と。

考えてみれば、ずいぶん早まったクリスマスの挨拶です。けれども、この挨拶があったからこそ、マリアの中で、その日からクリスマスに向けた備えが始まったのです。御子を宿し神の子を産むための備えが、始まったのです。

「クリスマスおめでとう」と、朝から挨拶を交わされた皆さん。皆さんは、今日、天使になられたのです。神から遣わされて、クリスマスの喜びを伝える天使の役割を、皆さんは、今日、担われているのです。お互いに対して挨拶を交わされた皆さんにとって、「マリア」は、誰のことでしょう。まだクリスマスを知らない「マリア」のところに行って、「おめでとう」と挨拶を告げるために、皆さんは、今日、天使に任命されているのです。

「恵まれたあなた！」

けれども、天使の皆さん、「おめでとう」とクリスマスの挨拶を告げても、もしかすると、今日はまだ、教会の外では怪訝な顔をされるかもしれません。とくにクリスマス商戦の中にあるのに、クリスマスソングにあふれているのに、世の中の人たちは、意外と律義に24日まで、「クリスマスおめでとう」とは挨拶をされないようです。大晦日までにはすっかり正月の準備を整えて、すでにおせち料理も食べているのに、まだ新年の挨拶をしないで、夜中の日付変更をカウントダウンして待っているような世の中です。クリスマスも、挨拶は当日になってから、と当たり前のように考えているのでしょうか。わたしたちが、今日、道行く人や信者ではない家族に「クリスマスおめでとうございます」と挨拶しても、きつと戸惑われる方が多いのではないのでしょうか。

マリアも、天使の挨拶に戸惑っていました。いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだのです。そうだとしても、ここで躊躇して二の句を告げることができなかつたら、天使の役目を果たせません。ガブリエルは、自分の役割を知っていました。怪訝な顔をして見つめるマリアに、言葉を続けたのです。

「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた」。

昨日、もうとくに日が暮れた夕べの時刻に、教会の玄関の戸締りをしようとして出て行きましたら、一人の青年が、玄関のガラス窓に掲示しているクリスマスのポスターを見ていました。声をかけると、「キリスト教徒ではないけれども、24日の礼拝には出てよいのですか」と問われましたので、「もちろん」とお応えしました。チラシを持って行かれましたので、今日か明日いらっしゃるのではないかと、秘かに期待しています。

ただ、わたし自身は少し後悔もあります。そのときに、わたしは、天使になって、告げるべきだったのではないかと、「おめでとう、恵まれた方」と。きつと、中に明かりのついている教会の前に立ってポスターを見るというだけでも、勇氣がいることだったと思うのです。わたしだったら、歩きながらチラシ見をして、あとはネットで検索して調べようとするでしょう。中の者に声を掛けられるかもしれないのですから。どこかの教会の信者でもないし、教会のことをよく知っている方でもなさそうなのに、それでも、そこに立たれていたというのは、どうしてだったのでしょか。それは分からないとしても、わたしは、その青年の前に、思いがけず出て行くことになったのですから、彼に告げるべきでした。「クリスマスおめでとう。あなたは恵まれた方ですよ」と。そう挨拶をして、戸惑う彼に怪訝な顔をされたら、ガブリエルがマリアに告げたように、クリスマスの喜びの知らせを、一足早くその人にお知らせすることができたのに、と思うのです。

今日こそ、わたしは、天使になりましょう。そして、皆さんに「おめでとう」とご挨拶をして、言うのです、「神の恵みをいただいたあなたは、神の子を宿し、神の子の誕生する器とされるでしょう」と。皆さんも、今日、「おめでとう」と挨拶を交わして天使になられたのですから、この言葉を届けてほしいのです、今日、出会われる人に、家族に、道行く人に。

「主があなたと共に！」

ガブリエルがマリアに告げた言葉は、マリアだけに与えられたものではありません。教会は、このマリアの物語をクリスマスごとに繰り返し聞き直しながら、このマリアこそ最初のキリスト者であると考えてきました。教会はマリアから始まった、とさえ言い表してきたのです。このマリアの物語は、わたしたちが執り行う「洗礼」の神秘を教えてくれている、というのです。洗礼によって、わたしたちは「キリストと結ばれて神の子とされる」と教えられてきました。マリアの物語に沿って言い直すならば、わたしたちは、洗礼によって、神の子キリストを宿し、神の子として新たに誕生するのです。わたしたちは皆、マリアのように神の子を宿し、神の子の誕生を自らのこととして体験するのです。

この神秘は、実際に子を宿し産む経験をするこゝない男性には想像しきれないところがありますが、女性ならばきっと直感的に分かるのではないのでしょうか。神の子が自分のうちに宿ってくださり、ときを経て、神の子が誕生する。それは、もしかすると、もう一人の自分が現れて来るような感覚なのかもしれないと、わたしは想像することがあります。父親として傍らで母子の密着した関係を見てきて、母子はやはりいつまでも「へその緒がつながっている」ような関係にあって、母親にとっては我が子は自分の一部であり続けるのではないかと思うのです。

神の子が宿ってくださり、神の子が新しく誕生する、というとき、そこで誕生するのは、マリアの物語では、実際には幼子イエスです。けれども、マリアは、この幼子イエスの出産・誕生を通して、自らも、古い自分から離れた新しい「神の子」として誕生させられる者であることを経験させられたのではないのでしょうか。わたしたちも、そのようにして、神の子を宿し、自ら神の子として、古い自分ではなく新しい人として生まれることを経験することができる。洗礼の営みを通して、わたしたちは、そう教えられているのです。

天使ガブリエルは、マリアに向かって「おめでとう」と挨拶を告げたときに、その「恵まれた一人の人」に、告げました。「**主があなたと共におられる**」。

わたしたちの中に「神の子」が宿るのは、神から与えられる恵み以外の何ものでもありません。人としての子さえ、医学の発達した現代でも、なお、子は「授かりもの」として与えられるというのが、実感でしょう。「神の子」の場合は、なおさらです。「神の子」が宿るのは、わたしたちが何者であれ、神がお与えくださる恵みなのです。わたしたちが「神の子」となるのは、何か知識を得たり、祈り深くしたからでもないのです。ただ、神が、わたしたちと共にいてくださるうとして、その御心を実現なさるために、恵みとして、わたしたちの内に神の子をお送りくださったのです。御子キリストをお送りくださったのです。この世界に、わたしたちの間に、いいえ、わたしたち一人ひとりの中にも、です。

マリアは、言いました。「**わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように**」。神がお与えくださるというのです、あなたにも、どの人にも。そうであれば、わたしたちも、ただマリアのように小さく頷いて、神の恵みの中に身を置くほか、ないのです。